私がなぜ現在の科目を選んだか

「呼吸器外科」

信州大学医学部外科学教室呼吸器外科分野
勝　野　麻　里

学生時代，外科実習はとてつもなく苦手でした。長時間立たされても手術所見はよく分からず，雰囲気にも馴染めず，絶対に外科医にはなるものか，と固く心に誓っていました。それから３年後，私は外科に入局していました。

大きな転機は，初期研修医１年目に経験した肺手術の Wet Lab です。実際に手を動かしてはじめて分かる手技の難しさと奥深さ，そしてできた時の喜び。Lab とはいえ，自分の技術で人を救えるかもしれないという可能性に，強く惹かれました。もともとスポーツでも黙々と１人で技術を磨くことが好きだった私は，こうした仕事が自分に向いているのではと感じるようになりました。学生時代に抱いていた悪印象は，術者の立場に近づくほど薄れていきました。

とはいえ，最終的な決断は専門医登録締め切りの２週間前まで悩み続けました。最大の不安は，将来の出産・育児との両立です。要領のよくない自分にやれるのか，それを許容してくれる環境が外科にあるのか。現教授である清水先生の後押しもあり，最終的に本当にやりたかった外科を選びました。

現在，３歳の娘を育てています。産後復帰直後は夜泣きによる睡眠不足で体力的に厳しい時期もありましたが，夜間・休日対応を免除していただきながら無理のない範囲で手術を経験し，徐々に執刀数を増やすことができました。両立の葛藤は今も尽きませんが，妥協せずに望む仕事を選べたこと，そしてその働き方を受け入れてくださる周囲のスタッフに，日々感謝しています。

２年間，学生担当として学生と接する中で，「外科＝きつい」という印象は今なお根強く，特に女性が将来への不安から敬遠する姿をよく目にします。そうした不安が少しでも和らぐよう，将来は明るく働きやすい職場づくりに貢献していきたいと思います。

（新潟大平31年卒）

私がなぜ現在の科目を選んだか

「臨床検査技術科学」

信州大学医学部保健学科検査技術科学専攻
重　藤　聖　子

子どもの頃，地域の医療機関で看護師として頼りにされていた母の姿を見て，漠然と医療系を進路として考えていました。身近な大人から情報を得たり，得意科目や科学的な面白さを活かせる仕事を模索したりするうちに，病院で黙々と働く臨床検査技師のイメージが自分に合っているのではないかと思うようになりました。

信州大学医療技術短期大学部を卒業後，附属病院の検査部に所属し，免疫，生化学，血液，一般検査などの検体検査に携わりました。その後，中央採血採尿室や生理機能検査へも業務の幅を広げていく中で，複数の検査部門が横断的につながり，一つの症例を追うことができる点に検査技師の魅力を再発見しました。また，患者さんと直接対面する業務を通してデータを提供する責任の重みを実感するなど，経験を積むほどにこの分野の奥深さを知ると同時に，まだまだ未熟さを感じる日々でもありました。現場で専門性を高める中，母校の４年制移行に伴う大学院の新設や，研究意識の高い先輩方に刺激を受け進学を決意し，2012年に保健学博士を取得しました。

私がこの道を志した当時に比べ，コロナ禍における検査の重要性をきっかけに，臨床検査技師の社会的認知度は大きく向上しました。かつて私が抱いていた黙々と働く裏方というイメージとは異なり，現代の検査技師はチーム医療の重要な一員として活躍の場を広げています。

現在はご縁あって母校の医学部保健学科の実習助手となり，次世代の育成に向き合っています。未来を担う学生にこの仕事の魅力を伝えることは，これからの医療業界を支えていく上で重要な役割です。大学で学ぶ基礎的な知識や技術の習得にとどまらず，自ら考え，現場で柔軟に対応できる能力を育めるよう，今後も真摯に教育活動に取り組んでいきたいと思います。

（信大大学院博士後期課程　平24年卒）